

石造物に想う

都留市文化財審議会会長 河 口 智 慮

長い間、私たちの念願でありました都留市の石造物調査について、第一集盛里地区、第二集禾生地区を含め、市内全域に亘る総合編が刊行されることになりましたことは、まことにご同慶の至りであります。

一言に石造物と申しましても、その分野は広く各種石仏像、各種石造塔、碑、或は鳥居、狛犬、灯籠、石橋、道標、石棒類に至るまでその内容は多種多様であります。神社仏閣の境内や村境の辻、或は旧道沿いや峠路などに、はかなくも消え去る運命に置かれている石造物、これら石造物には、私たちの祖先の切なる想いがこめられているのであります。

石造物調査に当って大切な心構えは、石造物の御前に心静かに対するとき、石仏像は微笑みかけ、他の石造物は何かを語りかけてくれます。そうした心のささやきが、それぞれの時代背景の中で生きぬいてこられた、祖先の民俗生活や民間信仰の在り方を探り、生命のつながりとそのぬくもりを感じ、祖先の心を読みとり、更に仏教の庶民化と複雑な土俗信仰との結びつきの中から、それぞれの石造物の美術的価値を見出し、土地造成工事等のため激しく変貌する地域の中で、私たちは、わが郷土の習俗、信仰及び伝承等について、改めて見直すことが調査の大切な対象となるのであります。

只、願わくば、偉大なる先人の心情がこめられている、これらの尊い遺産の保護保存に努め、以て後世に伝承されることをひたすらに乞うものであります。

先人の生活のさまを尋ねんと

石造物にしばし対する

石造物の解説

庚申塔

六十日に一度めぐってくる庚申の日に、その夜を眠らずに過ごして健康長寿を願う信仰がある。これを守庚申とか庚申待と
いう。この源流は、人の身中において人を短命にする三尸さんしを除去して長生を願う道教の信仰にある。

「人の身中には、みな三尸九虫が宿っている。この尸虫が人に大害をする。庚申日には昇天して、天帝に人の罪過を告げて記録し、生命をちぢめようとしている。三尸は上中下尸で名を彭倨・彭質・彭矯といい、それぞれ人に害をする。道を学び、長生を修める者は（不老不死を得ようとする者は）先ず三尸九虫を滅せなければならぬ。いたずらに服薬や断穀をして長生不死を求めてみても、それは得られない。この三尸を制する方法は、庚申の夜を眠らずに守り、天帝に罪を訴えることをできないようにすることである。罪が五百条に満つると、其の人は必ず死ぬ。三たび庚申を守れば三尸は振状し、七たび庚申を守れば三尸は長絶する」というのである。

まず庚申塔を塔型で分類すると宝塔、宝篋印塔、石幢、燈籠、層塔、五輪塔、板碑、磨崖仏、石祠、各種の墓石型、自然石、その他の型に分れている。また像塔と文字塔に分けると、像塔の青面金剛像が市内では最も多い。

道祖神

道祖神はいろいろな信仰を含んでいる。旅の神あるいは道の神と考えている人が多い。また村の入口や峠などに祀られているところから、境を守る神、悪魔を追い払う神ともいえる。正月十五日（小正月）に子供たちが道祖神のある所でドンド焼（左義長）をすることから、子供の神でもある。性をかたどる石を道祖神の神体とする所も各地に見られる。

道祖神は普通サエノカミ、サイノカミ、セーノカミなどと呼ばれる。ドウソジン、ドウロクジンという所もある。

道祖神の像塔がみられるようになるのはおおむね寛文以後であると思われる。

道祖神の像塔を分類すると、一番多いのが文字塔で通常「道祖神」とあるが、その中でも羽根子入口の「出雲路幸神」はめずらしい。

次いで、双体像で、江戸初期のものは僧形・合掌で男女の区別が見られない。元禄ごろから神像風のものが見られる。両像が手をひいたり握手したりするのは宝永、正徳ごろからで、鉢子や盃を手にする祝言像は享保ごろからである。幣束を刻むものは元文ごろから見られる。なお接吻・抱擁・交合像は県内に見られるが、その数は少ない。宝曆ごろ以降の建立である。陰陽を思わせる形の石・石祠・円形自然石などを神体としている地方もある。

六地藏

地藏が六道を輪廻転生する家生を救済するということから、六つの分身を考えて六地藏として信仰することは平安末期に始まったといわれている。寺院の門前や墓地入口に一般に見られるようになるのは室町末期からである。石造六地藏には、丸彫り像（宝、福源院）舟形光背彫り像を六体並べたもの、一石六体並べて彫ったもの、石幢の火袋に彫ったもの、（普門寺、石船神社）六角柱に一体ずつ彫ったもの、上下二段に彫ったものなど種々ある。また、一観音六地藏形式のものもあるが土地では七地藏と呼んでいるものもある。

七観音

平安時代中期に浄土教が説かれ、六道輪廻の思想がひろまるにつれて、その苦しみは観音菩薩を念ずることによって、のげることができるとして、六道に六体の観音を配ることが行なわれた。

天台系では、准提観音の代わりに不空羅索観音ふくくろそくくわんおんを加える。全部で七観音として祀る。

十日市場の自得院にある七観音は江戸中期につくられたものと思われる。

十三佛塔

死者の追善の法事を修めるとき、その年忌に配当された十三の佛菩薩を信仰するものである。この思想が一般化されたのは南北朝時代である。

萬靈塔（等）

萬靈塔は寺院の境内や墓地に建てられている場合が多い。このほかの石仏や石塔と異なり、造立することが目的でなく、萬靈塔自体に仏教で有情と呼ばれるところのこの世の中における生命あるものごとくの靈を宿らせ、この塔を回向することによって万靈を供養するということを目的とするので、日常多くの人から回向を受けやすい場所に建てられる例が多い。萬靈塔は塔型も一定していないでデザインも千差万別であって、銘文もまたいろいろである。法泉寺の萬靈塔は横に彫りかけの字がある。また次のような萬靈塔もある。「奉納大乘妙典日本巡行者万靈」「南阿弥陀佛三界等」「三界万靈塔」

写経塔

經典を書写することには三つの目的が考えられる。第一は釈尊の教えてある經典を写経により、世にひろめようとするものである。

第二は写経し、これを埋経したり靈地に納経することによって後世すなわち釈迦滅後、弥勒菩薩下生の時まで伝えるため残すことである。

第三は經典を写すことを修行とし、それを果たすことによって心の安らぎを得たり供養の目的を果たす行為であると考えたり、このことによって功德を得られるとし、写経により信仰心を表わそうとしたものである。

東陽院の経玉一字一石塔もこの写経塔の一種であるが、市内では見られない。

三ツ峠は修行者の靈地であったためか、写経塔の種類が多く見られる。

馬頭観音

馬の頭を持つ観音で、頭上の馬は、転輪聖王の宝馬が四方をさけて威伏するように生死の大海を渡って四魔を承伏する力を表している。恐ろしい恐りの相をしているのは、慈悲で教化することができない衆生のため仏が恐りの相となって救いあげようとするものである。頭に戴く馬からの連想によって、馬の供養や無病息災の祈願をこめて建てられている。時代が下るに従って特定の死馬の供養の目的で造立され、墓標的な意味合いを強めていった。

馬頭観音を分類してみると、「馬頭観音」「馬頭観世音」「馬頭觀世音菩薩」「馬頭大士」「馬頭尊」「馬頭明王」「馬頭官」文字塔の上部に馬首像がある。

二十三夜

二十三夜に講中が集まり勸行、飲食をともし、月の出を待つ行事を二十三夜の月待という。月は勢至菩薩の化現という信仰があり、勢至の有縁日が二十三日であるとされているところから月に対する礼拝は二十三日という信仰が生まれたという。

二十三日夜塔は、講中で供養のしるしに造立したものである。男だけで講をつくる場合もあるが、女性のみ講が多い。

小形山富春寺境内にある塔は、元禄一七年（一七〇四）―但しこの年は宝永元年と改元―のものであり、菩薩の座像が半浮彫されている。与繩の天正寺入口のものは立像合掌仏であり「二十三夜供養、同行五人」とあり、夏狩南小路には立像合掌仏で作例としては珍しい。

市内では「庚二十三夜甲塔」「奉納百番」「二十三夜」「辯財天」がある。

二十六夜

二十六夜の月の出には阿弥陀、観音、勢至の三尊のお姿があらわれて、これを拝めば幸福がえられ、また、平素の望みを祈ればかなえられるという。戸沢の二十六夜山には旧暦七月二十六日には山頂でこの遙拜のことが部落をあげて行なわれたという。二十六夜山（一メートル一〇センチ）の石碑がたっており、法能郷中、玉川村中、谷村村中の刻銘がある。

勢至尊

勢至菩薩「偉大な威力を獲得した者」の意で、智慧を表わす菩薩、阿弥陀如来の右脇侍で、観世音とともに弥陀三尊を構成する十三仏の一つである。

四日市場火の見やぐら下の勢至尊は文字塔で自然石に刻まれている。勢至菩薩が二十三夜待の礼拝本尊とされているので、二十三夜待供養塔である。

百番供養塔

平安時代末期に西国三十三所観音霊場巡礼の信仰が現われ、その後、関東にも秩父礼所が成立した。江戸時代には観音巡礼が庶民に広まり各地に「百番供養」の石塔が建立された。井倉みどうしの、ふじ道ぞいにあるのは、角柱状文字碑であり文政二年（一八一九）のものである。

百番供養塔を分類すると、「百番順礼供養塔」「奉納百番供養者也」「百番観世音菩薩」がある。

郡内三十三番霊場として普門寺を一番礼所として長安寺、西涼寺、円通院、真福寺、泉福院があげられている。

百度石

社寺の境内に「百度石」「百度」を彫った石造物を見かける場合がある。これは百度詣の際の起点の目安として建てられたもので「百度石」と呼ばれている。

百度詣は、平安時代からの祈願習俗の一つであった。平安時代、神仏への祈願の方法を数量で計るという数量信仰が発生した。宗教の型式化ともいわれるが、読経や参詣を数多く重ねることによって功徳を得るという考えは宗教の庶民化に役立ったとも考えられる。

百度詣は一日に同じ神仏に百回参拝するという方法で、神社では拝殿の前、寺院では祠堂の前という通常の拝礼場所から境内の特定位置へもどり、再び拝礼場所へ行くという往復を一回と数え、これを百回繰り返すことである。

南無阿弥陀佛

南無阿弥陀仏に帰依するとの意味であるが「六字名号」または「名号」と称して浄土教の本尊を表わす。また口にこれを唱え、それを称名といい、また念仏ともいう。南無は梵語ナモの音写で、帰命と漢訳され、帰依の意味。阿弥陀仏は、無量寿仏と無量光仏との二義をもつ、浄土教で称名によってすべてのものは浄土に生まれることができると説くが、その根拠は中国、唐代の僧善尊の解釈によっている。すなわち、南無は願、阿弥陀仏は行で、願と行がそなわっているから称名によって往生で

きると説く。願とは仏に帰依して救いを願うこと、行は救いの働きである。俗に助命への呪術的力を信じ、また最後の救いを願い、ことに生命の危機や捨命にさいして「南無阿弥陀仏」を唱え、また発することが多い。

市内には「南無阿弥陀仏」の下に「徳本」と刻印してある石碑がある。近畿地方以東、関東に至る各地に見受ける徳本行者独特の書体である、いわゆる徳本念仏塔ともいわれている。

大日如来

摩訶毘盧遮那如来、大毘盧遮那如来という密教の根本教主であり、宇宙を仏格化した仏で、これを法身仏という。その智慧の光明は、昼夜の別ある日の神の威力を上まわることから大日といい、光明が四方を照らすから大光明遍照という。他の如来と違い宝冠を戴き髪を垂れ瓔珞、環釧、天衣をまとった菩薩の姿である。

扶桑廻國経供養塔

富士講の指導者は先達と講元で、先達は信仰面をつかさどり、先達は毎回登山し、登山の際は指揮をとり、日常は山開き（旧暦六月一日）や正五九（正月・五月・九月）に、あるいは毎月行なわれる、拝みの先導をし、また講員の依頼で病氣平癒などの祈願を行なうこともある。

この富士講は人心を捉え盛大になったため幕府はこれを忌避し、寛保二年（一七四二）、安永四年（一七七五）、寛政七年（一七九五）に加持祈禱行為や行衣を着用しての市中巡回行為を禁止する布命を出したこともある。

明治維新後、禁止令をうけて衰退していた富士講を糾合して扶桑教、実行教、丸山教が設立され、また一部の富士講は神道修成派などの傘下に入ったため各富士講はこれら教派神道各派の指導のもとに行動するようになり、明治以降の富士講碑にはこれら各教派神導の色彩をおびているものも少なくない。

市内には、扶桑廻國経供養塔、と富士仙元笠葉稻荷大神が富士講と思われる石碑しかない。

廻國塔

経典供養塔のうち納経塔の一種である「廻國塔」は、釈迦滅後、弥勒菩薩がこの世に下生するまで、大乘妙典と呼ばれる法華経をわが国六十六カ国の霊場に保存する目的によって六十六部作り、それを一部ずつ霊場に納める目的で国々を廻ったり、廻っていることを銘文にした塔のことである。

古渡の芝草に正徳四年の「奉納大乘妙典塔六十六部」鹿留村とある。

如意輪観音

意のままに現われ、六道の衆生の苦しみを取り去り、利益を与える菩薩とされる、変化観音の一つで、六観音（あるいは七観音）に数えられている。

この像は二臂と六臂があり座像で、右ひざを立て右臂を托し頬に手をあてている思惟形（考える形）をとるから弥勒菩薩といわれて混同されているがあまりで、江戸中期から民間信仰にとり入れられて月待ちの本尊となり二臂のものは女人の墓石となっている。

地藏菩薩

釈迦入滅後、弥勒仏が出世するまで無仏の間にこの世に現われて衆生を救済する菩薩という。平安中期以後極楽浄土の信仰が盛んとなり、末法思想が起るにつれて、地藏は閻魔王えんまおうの本地仏で常に六道をめぐって衆生を救い、極楽に行けるように力を貸してくれると信じられて広く信仰された。近世になって民間信仰と結ばれて広まり、火防、盗難除、病氣平癒など庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として祈願されるようになってきた。

また西（賽）の河原で地藏が子供を庇護するということから、地藏と子供とは強く結びつき、子育て地藏、子安地藏の名で信仰されている。

法泉寺には厄除地藏尊（元禄十二年四月）と刻ってある。又宝鏡寺の子育地藏、境の天満天神社の子育地藏の背中には、庚申供養（宝暦十二年^{壬午}龍十四莫）とある。郡内にはこのような地藏はめずらしい。永寿院の子育延命地藏。地藏は各地に多く見られる。

不動明王

この明王は、治病、安産、災害の除去怨敵降伏、財福を得るなど種々の祈願をかなえてくれる仏、八大王明の主尊で大口如来の変身といわれる。

田野倉先の宮境内の不動明王は、なかなか立派なもので忿怒形の一面三臂像である。

田原神社境内の不動明王、門原の不動明王も木造ですばらしい。

結界石（戒壇石）

長生寺の門前に「不許葷酒入山門」宝鏡寺の「禁葷酒」自然石であるが下が不名である。

銘文中の「葷」とは葷ニラ、ニンニク、ネギなどの臭気のある蔬菜類と辛ニカラシ、トウガラシなどの辛味のある刺激性の物をさし、肉も含めたものであり、精力が出るといわれる食物をさしている。

葷酒を禁ずるのは仏教本来の姿である。

これは俗界人が寺内にこれらのものを携えて立ち入ることを禁じる意味も含まれているようである。

また「葷」字のつくりの軍を支配者の意味として、あわただしい戦乱の中で支配者が交替しても寺院の独立性を守る意味もあるようである。

弁財天 水神

稲作農民の生命である水の神である。水源、池畔等に多く祀られる。建立は、元禄頃からといわれているが、数としては、

江戸末期のものが多く。像塔としては、弁財天が水神として祀られる。

四日市場瀬中の水神塔は、馬頭観音碑の中にあり、どこからか移されたものである。

小形山大原の弁財天は、字碑であるが、水田の神として建立されたものであろう。法能には自然石で、庚申塔・弁財天と字で同じ石に刻ってある、めずらしい字碑がある。

なお弁財天は、福神信仰や己侍供養の主尊としても祀られる。

石灯籠

石灯籠は、元来仏前に供える灯明台として造られたものである。平安時代のころから神社でも石灯籠が用いられるようになり、室町時代になって堂前左右に二基を配するようになったといわれている。

また、江戸時代には常夜塔なども派生し、神社の参道や入口に置かれ、一般の人からはごく親しまれた石造物として造られてきた。

構造的には下から基礎・竿・中台・火袋・笠・宝珠の六つの部分からなり、火袋の形によりその名称も四角、六角、八角灯籠と呼ばれている。

恵比須・大黒天

恵比須は七福神の一つとして、大黒とともに財宝を恵む神としてよく知られている。

江戸時代より恵比須信仰が大いに普及し、商家では十月二十日に釣具を持ち、魚を抱いたこの神の像を掛けて顧客や仲間を招いて馳走をした。

南海戸観音堂に石造物で恵比須大黒の併刻像があるが、市内では他には見られない。

五石橋

秋元時代に十日市場の銚子の口より水をひき、下流ヤカ村の用水とした。家中川にかけた橋の中、五石橋、と呼ばれる古い石造美術的なこの橋、上町より元坂に通ずる所、南陣門・泰安寺入口・家中屋敷郷蔵入口・ナメ岩・城内より城外足軽屋敷に通ずる所の五カ所にかかっていた。

現在円通院の池にかかっているものが、五石橋、の一つと伝えられている。

五輪塔

石造遺物の中で一般的によく知られているのがこの五輪塔である。五輪塔は仏教の五大思想の教えによる宇宙観を表わした地・水・火・風・空の五つの元素から形成されているという考えから発している。しかしこれが五輪塔の形として現われるのは密教の教えによるところであり、この起源は中国である。そして五輪塔として立体的に具体化したのはわが国である。

東漸寺の秋元時代の家老高山五兵衛の墓、古渡観音堂の五輪塔（寛永八年、市内では最古）。その他は、宝の丹保、金井の五輪坂、永寿院、広教寺、福源院などに現存している。

小山田家の墓

宝 桂林寺に小山田家の墓があり、郡内領主であった小山田氏九名の戒名が刻ってある。小山田越中守、小山田出羽守富春（桂林寺開基）小山田出羽守信有（領主）小山田左兵衛尉信茂（桂林寺中興開基）

森島其進の墓

森島其進先生、通称は彌十郎、子興と字す。宝曆二年、谷村下谷の絹商利八の長子として生まる。

林正良先生（林家六世の大学頭、謚号鳳潭）に程朱学を受け、傍ら御家流を学ぶ。

先生、性恬淡にして、宮利を忘れ、人を導き、人を救うを以て唯一の業とする。天明七年の飢饉の時に白米三百九十俵を出し、餓者を救い、又塾を開いて、子弟を教育した。

甲斐国志の編さんのとき松平定能と、ともに郡内領にあたった。谷村の両谷村、谷村領、及び神社の由来の文献として現在残る。